

22 農技号外  
平成22年(2010年)7月22日

農業改良普及センター所長 様

農業技術課長

高温に関する農作物・家畜類等への技術対策について

気象庁による関東甲信地方1か月予報(7月16日発表:予報期間7月17日~8月16日)によると、向こう1か月の平均気温は高い確率が50%であり、週別では1週目の高い確率が80%、以降は同40%となっています。

また、平年と同様に晴れの日が多く、雷雨の発生しやすい時期がある見込みです。

つきましては、別紙のとおり「高温に関する農作物・家畜類等への技術対策」について作成したので、平成22年度農作物等災害対策指針と併せて周知・指導願います。

担当：農業技術課 研究普及係・専門技術員 中村倫一(課長) 松崎良一(副主任専門技術員) 坂下 広(研究普及係 担当) TEL：026-235-7223(直通) FAX：026-235-8392 E-mail：nogi@pref.nagano.lg.jp
---

(別紙)

## 高温に関する農作物・家畜類等の技術対策について

平成22年7月22日  
農業技術課

### 1 共通

- (1) 農作業中の熱中症を予防するため、炎天下の長時間に渡る作業はできるだけ控える。  
また、帽子等日除け対策を万全とするとともに、十分な水分補給と休憩時間を確保し、体調がすぐれないときは作業を中止する。  
なお、作業服は吸湿性・通気性の良いもので、熱を吸収しないもの(白系統の色)にすると良い。帽子も通気性の良いものを着用する。

### 2 水稲

- (1) 水が必要な時期に不足しないよう、地域毎に早めのかんがい計画を立てる。特に、幼穂形成期～出穂・開花期は稲体が最も水を必要とする時期なので、高温・乾燥により水不足とならないよう留意する。  
(2) 極端な高温の際は、入水や掛け流し等により地温低下を図る。  
(3) 高温乾燥が続くとウンカ・ヨコバイ類が多発しやすいので、適期防除に努める。

### 3 大豆(水田転換畑)

- (1) 開花期～莢伸長期(約20日間)の乾燥は、着莢、子実肥大を著しく阻害するので、かん水可能なほ場は畦間かん水を行う。特に大雨等で過湿条件が続いたほ場では根の発達が悪く、乾燥の影響を受けやすい。なお、かん水に際しては、排水溝を設ける等して滞水しないよう留意する。  
(2) 高温乾燥が続くとアブラムシ、カメムシ類等の発生が多くなるので、適期防除に努める。

### 4 果樹

- (1) 樹体の日焼け対策  
主枝、垂主枝等、骨格枝の背面部は日焼けが発生しやすい。徒長枝は全て切らずに、間引くか又は新梢基部を30cm程度残す等して、「日除け」枝を設ける。葉がない部位は、白塗剤、わら、段ボール等で日除け対策を講ずることも有効である。
- (2) 果実の着色管理・日焼け対策  
ア 果樹類の基本として、着色管理等における新梢整理にあたっては、果実の日焼けが発生しやすい南西方向の樹冠外部の切除量を加減するとともに、除袋と葉摘みの時期をずらすなど、日焼けが発生しないよう配慮する。  
イ りんご等の着色管理では、日が当たる部位の葉摘みは一度に強く行なわない。また、午後から夕方にかけて葉摘みすると日焼けが少ない。玉回しに適した作業時刻も同様である。なお、回す角度が大きいと日焼けを生じやすいので注意する。  
ウ ぶどうで日焼けの発生が心配される場合には、袋かけと傘かけを併用すると軽減できる。  
エ ももで日焼けが心配される場合は、除袋をする2～3日前に袋の尻を破り、馴らしてから除袋をする。また、ピーチ袋等、ワックス袋は日射により高温障害が発生する場合がある。高温が続く場合、袋のすそを上げる、袋を外すなどして障害を防ぐ。
- (3) かん水  
ア 天候やほ場の水分状態、土壌条件に合わせて、適宜、かん水を行う。かん水量は、次ページの基準(果樹指導指針)を参考とする。  
なお、かん水設備のない地域では、土を掘って下層の湿潤状況を調べる等し、かん水が必要な場合は、タンク等で水を運んで無駄のないよう樹冠下を中心に散水する(ほ場面積の60%程度が目安)。かん水後は、蒸散防止のため敷きわら、マルチ等を行う。

第1表 かん水量とかん水間隔の基準

土 壌	1回のかん水量	かん水の間隔
粗粒質	20mm	4日
中粒質	30mm	7日
細粒質	35mm	9日

- イ かん水後は草刈りを行い、草による余分な水分競合・蒸散を防ぐ。
- ウ りんご、なしの落果防止剤は、高温乾燥条件では効果が低下しやすいため、処理2～3日前にかん水を実施するとともに、散布後もかん水を継続して実施する。
- エ ももは、収穫前の高温乾燥により成熟が遅れる場合がある。5mm程度のかん水を数日おきに行い成熟を促す。なお、中晩生種では、収穫開始10日前まで通常のかん水を行う。
- オ ぶどうは、高温乾燥により果肉の軟化や着色不良につながるため、定期的にかん水する。また、急激な土壌水分の変動は裂果を誘発するので、土壌を乾かしたままにしない。
- カ なしでは、品種により葉焼け症状が発生する場合がある。また高温乾燥は果実肥大や日焼け果発生への影響が大きい。定期的なかん水を行い、症状の進行を防止する。またハダニ類の加害により葉焼けが助長されるので、ハダニ類の防除も徹底する。

(4) その他(収穫・害虫対策ほか)

- ア りんご、もも等の成熟は果肉先行傾向となるため、果皮色に頼らずに果肉硬度に注意して適期収穫を行う。
- イ 高温乾燥によりハダニ類、シンクイムシ、スリップス類などが増加しやすいため、適期防除に努める。散布に際して、特にハダニ類は死角が生じないように留意する。

## 5 野菜・花き全般

- (1) 高温乾燥により、蒸散量が急激に増加するので、適量のかん水を行う。
- (2) 施設園芸品目全般に、強日射による高温や日焼けを防止するため、寒冷紗や遮光(遮熱)資材を用いて、できる限り室内の気温低下に努める。また、換気扇等を利用し、換気の徹底を図るとともに、ハウス妻面のビニール等を取り除いたり、施設内外及び周囲の遮へい物を整理したりして通風を図る
- (3) ハダニ類、スリップス類が増加しやすいため、適期防除に努める。

### 5-1 野菜

- (1) トマト、ミニトマトは、高段位の着果不良を起こすので、ハウスの側面や妻面を解放して換気に努める。なお、日中の遮光や細霧冷房は気温低下に有効である。
- (2) スイカ、ピーマン等、果実が露出していると日焼けを起こすので、草勢の維持に努めるとともに、わらや遮光資材で日覆いをする。また、ジュース用トマトは、収穫作業により果面が露出しやすくなるので、作業後は果面の露出している部分を、わら等で覆って日焼け果の発生を防ぐ。
- (3) 高温乾燥が続くと、カルシウム欠乏による生理障害(縁腐れ、心腐れ、尻腐れ)が発生しやすいので、適宜かん水を行うとともにカルシウム資材の葉面散布を行う。

### 5-2 花き

- (1) 花き類全般
  - ・切り花の鮮度保持のため、切り前、低温処理、鮮度保持剤の適正使用などに留意する。
  - ・施設花き等、高温時の農薬散布は薬害が生じやすいので、気温低下時に散布する。
- (2) キクは、高夜温が続くと花芽分化及びその後の発達が促進され、開花期が早まるので、ほ場内外の通風を良くして気温の低下に努める。
- (3) カーネーションは、高温による品質低下が懸念されるので、施設の通気を良くし気温の低下を図るとともに、肥料や土壌水分が不足しないよう肥培管理にも留意する。特に「フランセスコ」等は高温によるブラインドや奇形花が発生しやすいため、遮光、換気対策を徹底する。

- (4) リンドウは、高温による日焼けが懸念されるので、枝整理等を行って通風を図るとともに、敷きわらによる水分確保と地温上昇を抑制する。

## 6 菌茸

- (1) 冷凍機の負担を軽減するため、直接日光が当たらないよう日除けを行うと共に、冷凍機周辺の通風を良くする。
- (2) 日中の換気は熱交換機を利用する。

## 7 畜産

園芸畜産課による直近の「畜産とくток情報(家畜の耐暑対策)」と併せて対応する。

### (1) 畜舎管理

- ア 側壁の窓や天窗、サイドカーテンは全面開放し、通風に努める。併せて、畜舎の外回りの環境整備(除草等)により、舎内に溜まった熱気の排出を促す。
- イ よしずや寒冷紗等で直接日光をさえぎるとともに、なるべく家畜が暑さを感じる前駆に向けて送風できるよう、扇風機、ポリダクト等を設置し、換気送風に努める。
- ウ 屋根裏に断熱材を設置するとともに屋根への散水又は工業用消石灰等を塗布し、舎内温度の低下に努める。舎西壁側に寒冷紗を設置することも効果的である。
- エ 天井の低い畜舎では、逆に窓を閉じて一方から「負圧換気」することにより、畜舎内に新鮮な空気が流れ、防暑効果が高い。(トンネル換気法)

### (2) 家畜管理

- ア 密飼いを避けるとともに、給水にあたっては、常に新鮮な水が飲めるようにしておく。
- イ ダクトファン、扇風機、細霧噴射機等を利用して、家畜に直接送風、散水する。
- ウ 夜間等の涼しい時間帯の飼料給与、あるいはパドックへの放飼などを行い、新鮮で高品質かつ嗜好性・栄養濃度の高い飼料の給与等で食欲と栄養を確保する。場合によっては、給餌時間や給与回数を変更する。また、ビタミン、ミネラル類も補給する。

### (3) 飼料作物管理

- ア 牧草類の刈り取りは5～8cmのやや高刈りとし、再生力が悪くならないようにする。
- イ 水田転換畑等で、かん水が可能な飼料畑ではかん水に努める。なお、事前に排水溝を設ける等して滞水しないよう留意する。
- ウ かん水と追肥を兼ねて家畜尿を施用する場合は、水で2倍以上に希釈して行う。